

大学生の職業選択不安と多次元アイデンティティの関係の検討 —首尾一貫感覚の調整効果を視野に入れて—

An Examination of the Relationship between University Students' Career Choice Anxiety and Dimensions of Identity: with a View to the Adjustment Effect of Sense of Coherence.

磯和 壮太郎 *ISOWA Soutarou* ・ 今井田 貴裕 *IMAIDA Takahiro*

問 題

進路決定とそれに伴う就職活動は、学年によって程度の差はあるものの、大学生において避けられない課題である。これまで、大学生における就職の問題を捉える視座として、学生から社会人への「移行（transition）」が取り上げられ検討されてきている¹⁾。ライフサイクルにおける移行とは、個人が人生の中で経験する重要な変化や節目²⁾を意味するが、現在の環境から新しい環境への移行において、新しい環境に適応できるか否かは大きな分岐点となる³⁾。実際、学生から社会人への移行はライフサイクル上の大きな転換期のひとつであり、就職は青年期後期の重要な発達課題として位置づけられている³⁾。

大学生になるまでのライフサイクル上の移行には、就学（一般的には小学校への就学）や進学における学校段階の移行があり、その移行にあたる問題として、小1プロブレムや中1ギャップ、高1クライシス、大1コンフュージョンという概念が提起されている⁴⁾など、それぞれの移行期が個人にとって大きな心理的危機の場面であると考えられる。一方で、就職に関する移行期は、これまでの就学や進学とは異なる面を有している。就学においては、まだ幼児期であるために時間的な感覚が未熟な状態での移行であるし、進学においては、中学校、高等学校、大学と修学内容が高度化するという点はあるものの、同じ「学校」というカテゴリー内での移行である。その一方で、大学生から社会人への移行は、時間的な感覚が発達したうえで、自らの将来展望も踏まえて自発的に活動を行い、大学生にとっては未知な部分の多い「社会」へと踏み出していくという性質を有している。また、高等学校から大学への進学にあたっては、大学入学試験を受験するという比較的わかりやすく、また対策方法もある程度明確な課題であったのに対し、大学生から社会人への移行期には、就職活動やそれに伴う自己分析という、活動前の大学生にとっては具体的イメージの持ちづらいと考えられる課題に取り組むこととなる。このため、大学生から社会人への移行にあたっては、これまでの移行期に伴った不安よりも多様な不安が伴うことが想像される。このように、大学生の就職活動には特有の不安が必然的に伴うものであり、この不安は就職不安として研究されてきている⁵⁾。

この点について、若松⁶⁾は、就職に関する意思決定は購買行動などの他の意思決定課題に比べて重要度が著しく高いとしている。これは、「やりなおしが難しいこと、やりがいや職場の風土など、数値で表しにくい属性が多いこと、実情が把握しづらい業種・職種も多く、また配属部署や上司・同僚の人柄など偶発的に決まる属性が少なからずあることといった特徴」⁶⁾があるためである。就職に関わる意思決定は重要度・困難度ともに高く、そのために就職に関する不安は実際に大学生から社会人へと移行を果たすまでの長期にわたって体験されることとなる。そのため、就職活動と精神的健康との関係を検討した研究も散見される^{7) 8) 9)}。

以上のように、就職とそれに伴う就職活動は、大学生にとって極めて重要であるものの、困難度が高く、しかしながら避けられない課題である。そのため、就職先等を決めることができない職業未決定¹⁰⁾の状態に陥ることも珍しくはない。特に、アパシーや留年などのアイデンティティの発達が不十分なための職業未決定が指摘されており¹⁰⁾、アイデンティティと職業未決定との具体的な関連性も検討されてきている^{10) 11) 12)}。また、職業未決定の背景には、職業選択において生じる不安感を意味する職業選択不安が強いことも確認されている¹⁾。

アイデンティティとは、Erikson, E. H.¹³⁾が提唱した漸成発達理論の中核概念の一つであり、自分自身と社会との関係を認識する過程を通じ、個人が自己の一貫性と連続性を確立した状態といったものである¹³⁾。アイデンティティの形成は青年期の重要な発達課題であり、現代の大学生においても職業的な要因が重要な意味を持つことが指摘されている^{14) 15)}。実際、下山¹⁰⁾はアイデンティティにおける「自分の確立」の強さが、就職未決定が悪い状態に対して有意な負の効果を有していることを、森本¹¹⁾は学生が獲得しているアイデンティティのうち、対自的同一性（自分自身が目指すべきもの、望んでいるものなどが明確に意識されている感覚）¹⁶⁾の強さが職業未決定に対して負の効果を有していることを確認している。また、職業未決定の背景には先に述べた職業選択不安があり、これに対しても、学生が獲得しているアイデンティティは有意な負の効果を有していることも確認されている¹¹⁾。このように、アイデンティティと職業未決定や職業選択不安の間には負の関係性があり、アイデンティティがよく発達している個人ほど、職業選択不安が低いといえるだろう。

ところで、上述の森本¹¹⁾の研究や、アイデンティティと職業アイデンティティ、職業未決定の関連を検討した安藤・有子山¹²⁾の研究では、アイデンティティの測定に多次元自我同一性尺度¹⁶⁾が用いられている。わが国におけるアイデンティティを測定する尺度には他に多次元アイデンティティ発達尺度 (Dimensions of Identity Development Scale: DIDS)¹⁷⁾の日本語版¹⁸⁾も開発されている。Luyckx, et al.は、アイデンティティ形成の二重サイクルモデル (a dual-cycle model of identity formation) として、アイデンティティの発達過程について、将来の計画へのコミットメントを形成するために多様な選択肢を探索する過

程（広い探求，コミットメント形成）と，既に選択した対象が真にコミットするに値するか否かをさらに検討し，それへのコミットメントを深めていく過程（深い探求，コミットメントとの同一化）とに区別して捉えることを提案し，これを測定する尺度としてDIDSを開発した¹⁷⁾。アイデンティティと職業選択不安との関係を検討する際には，DIDSの日本語版を用いるほうがより示唆に富んだ結果が得られると考えられる。これは，多次元自我同一性尺度がアイデンティティにおける各領域の形成度を問うているのに対し，DIDSはアイデンティティの発達過程を捉えることを主眼に置き，コミットメント対象の形成と同一化，そしてそのための探求のあり方を問うているためである。コミットメントする対象があるか否かは，大学生が就職活動に向けて一步を踏み出すうえで重要な要因であると考えられ，大学生の職業選択不安を捉えるうえで重要な観点であると考えられる。しかしながら，DIDSの日本語版と職業選択不安の関連を検討した研究は管見の限り見られなかった。そこで本研究では，大学生の職業選択不安に対してアイデンティティ発達のどの側面が効果を有しているかを検討することを第一の目的とする。

これに加え，大学生にとっての就職の問題を捉える視座として移行の観点，すなわち就職や就職活動が個人にとって大きな心理的危機の場面であり，職業選択不安はストレスヤーでもあることに注目したい。すなわち，就職活動とは，職業選択が迫られる状況というストレスヤーに対処していく過程でもあると捉えられる。このように考えたとき，首尾一貫感覚（Sense of Coherence: SOC）の強さが，職業選択不安の弱さに関連している可能性が指摘できる。

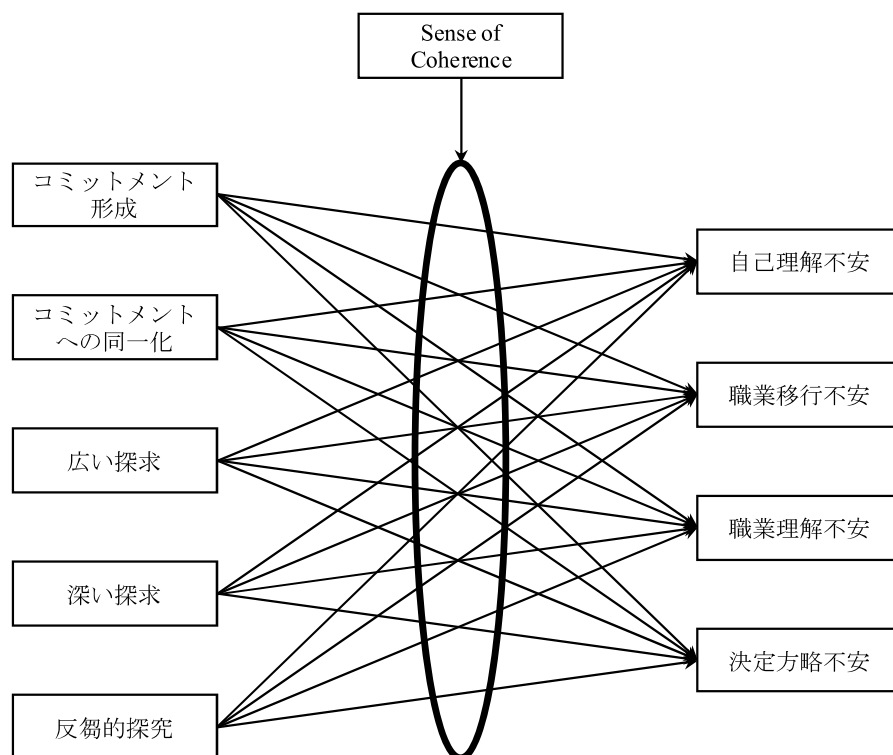
SOCは，Antonovsky^{19) 20)} が提唱した健康生成論の中核概念であり，「ストレス対処力」や「健康生成力」と称される²¹⁾ 概念である。Antonovsky¹⁹⁾ によれば，SOCは，「その人に浸みわたった，ダイナミックではあるが持続する確信の感覚によって表現される世界（生活世界）規模の志向性」と定義され，把握可能感，処理可能感，有意味感の3つの下位概念から構成される。把握可能感は「自分の内外で生じる環境刺激は，秩序づけられた，予測と説明が可能なものであるという確信」と，処理可能感は「その刺激がもたらす要求に対応するための資源はいつでも得られるという確信」と，有意味感は「そうした要求は挑戦であり，心身を投入しかかわるに値するという確信」とそれぞれ定義される。また，ストレス対処において，SOCは我々が有する様々な資源を意味する用語である汎抵抗資源（General Resistance Resources: GRRs）を動員するための力であるとされており，健康生成モデルとして検討されている。先に述べたアイデンティティの感覚の強さもSOCによって動員されるGRRsのひとつとして捉えられる²¹⁾ ため，職業選択不安に対してアイデンティティの感覚の強さが有する効果はSOCによって調整されている可能性が高い。すなわち，例えアイデンティティの感覚が強くとも，SOCが弱ければ職業選択不安に対して効果を有しない可能性が考慮される。なお，健康生成モデルの統計的検討においては，GRRsから目的変数への影響をSOCが媒介するモデル（媒介モデル）として提示されている^{22) 23)}。

しかし、GRRsがSOCによって動員されるという点を踏まえるなら、GRRsから目的変数への効果がSOCによって調整され、SOCが強い場合には効果を有するが、SOCが弱い場合には効果が減弱あるいは消失するモデル（調整モデル）として示される方が妥当であるとも考えられる。本研究においては、健康生成モデルを後者の調整モデルの観点で捉え、大学生の職業選択不安に対してアイデンティティの感覚の強さが有する効果が、SOCの強さによって調整されているかを検討することを第二の目的とする。

本研究の目的は、第一に大学生の職業選択不安に対してアイデンティティ発達のどの側面が効果を有しているかを検討すること、第二にこの効果がSOCによって調整されているかを検討することである。これらの検討には調整分析を用いることとし、Figure 1 に示したモデルに対し構造方程式モデリングを適用する。この検討によって、大学生が就職活動開始前までに身に付けておくべき要素のひとつを明らかとすることが目的である。

なお、大学生が就職活動に向けて一步を踏み出すうえで、希望の就職先イメージを明確にすることは重要である。このイメージはコミットメントしている対象や抱いている職業選択不安の種類によって左右されることが考えられることから、アイデンティティの強さと職業選択不安の強さが希望の就職先イメージの明確さに与える影響も副次的に検討する。また、大学生が取り組むべき課題に取り組んでいることと、アイデンティティの強さと職業選択不安の強さが関連しているかを検討するため、単位取得の計画性も取り上げることとする。

Figure 1
検討した職業選択不安への調整モデル



方 法

本調査の実施手順と本研究の分析対象者

一般大学生 267 名の協力を得た。このうち、調査票に含まれていた 3 つのダミー項目 (e.g., この質問は 4 を選んでください) すべてに正確に回答し、欠測値のなかった 249 名 (男性 147 名, 女性 102 名, 平均年齢 19.32 歳 ($SD = 0.95$)) を分析対象とした。分析対象となった者の学年の内訳は, 1 年生 160 名, 2 年生 67 名, 3 年生 17 名, 4 年生 5 名であった。なお, 今井田・磯和²³⁾とデータの重複がある。

本調査の尺度構成

基礎的な属性を尋ねる項目と大学生活に関する項目 年齢, 学部, 性別と, 希望の就職先イメージの明確さ, 単位取得の計画性等の大学生活に関する項目を設けた。希望の就職先イメージの明確さは, 「あなたが将来就こうと思っている仕事のイメージがはっきりしていますか?」という質問に対して, 「1. 全くはっきりしていない」—「7. 完全にはっきりしている」の 7 件法で回答する 1 項目によって測定した。単位取得の計画性については, 「あなたは, 単位を計画通り取得できていますか?」という質問に対して, 「1. 全くできていない」—「7. 完全にできている」の 7 件法で回答する 1 項目によって測定した。

SOC Time Perspective-Sense of Coherence 9 (TP-SOC 9)²⁴⁾ を使用し, 測定した。同尺度は, University of Tokyo Health Sociology version of the SOC3 (SOC 3 - UTHS)²⁵⁾ における把握可能感, 処理可能感, 有意味感の各 1 項目に対し, 過去・現在・未来を示す文言を追加し, 各 3 項目に拡張したものである。これによって, Antonovsky¹⁹⁾ 20) が提唱した SOC の構成概念に近づけたうえで, 少数項目で捉えることを試みている。把握可能感 (項目例: これまでの私は, 日常生じる困難や問題を理解できたり予測したりできた), 処理可能感 (項目例: 現在の私は, 日常生じる困難や問題の解決策を見つけることができると思う), 有意味感 (項目例: これからの私は, 人生で生じる困難や問題のいくつかは, 向き合い, 取り組む価値があると思えると思う) のそれぞれ 3 項目計 9 項目すべてを用いて尺度得点を得た。尺度得点が高いほど SOC が強いことを示す。原版どおり 5 件法 (「1. あてはまらない」—「5. あてはまる」) で回答を求めた。

多次元アイデンティティ DIDS の日本語版¹⁸⁾ を使用し, 測定した。同尺度は DIDS¹⁷⁾ の日本語版であり, Erikson, E. H. によって提唱されたアイデンティティの感覚が, 個人によってどのような発達の様相を示すのかについて, コミットメント次元 (コミットメント形成, コミットメントとの同一化) と, アイデンティティの発達に必要なコミットメントに対応した探求次元 (広い探求, 深い探求), コミットメントに関与しない不適応的な探求を捉える次元 (反芻的探求) の計 5 つの次元によって, 多次元的に捉えることを目的としたものである¹⁷⁾。コミットメント形成 (項目例: 自分の人生をどうするのかについては, 自分で選んで決めた) 5 項目, コミットメントとの同一化 (項目例: 将来の計画のおかげ

で、自分というものがはっきりしている) 5項目, 広い探求(項目例: 自分が進もうとする人生にはどのようなものがあるのか, すすんで考える) 5項目, 深い探求(項目例: 自分がすでに決めた人生の目的が本当に自分に合うのかどうか, 考える) 5項目, 反芻的探求(項目例: どんな人生を進みたいのか, どうしても考えてしまう) 5項目のそれぞれを用いて尺度得点を得た。尺度得点が高いほど各要素が強いことを示す。原版どおり5件法(「1. あてはまらない」―「5. あてはまる」)で回答を求めた。

職業選択不安 職業選択不安尺度¹⁾を使用し, 測定した。同尺度は大学生の就職活動前にも見られる職業選択における不安に着目し, 職業決定前にも特徴的に見られる漠然とした不安を念頭に置いて開発されたものである。職業選択の前提となる要素についての自己理解に関する不安を意味する自己理解不安(項目例: 自分が何をやりたいかわからないのが不安である), 職業への移行に関する不安を意味する職業移行不安(項目例: 社会人として自分がちゃんとやっていけるかどうか不安である), 職業についての理解に関する不安を意味する職業理解不安(項目例, いろいろな職業があることを十分に知らないのではないかと不安である), 職業を決めていくことに関する不安を意味する決定方略不安(項目例: いろいろ考えすぎてひとつの職業に決められないのが不安である)の4因子から成る。自己理解不安13項目, 職業移行不安8項目, 職業理解不安6項目, 決定方略不安5項目それぞれを用いて尺度得点を得た。尺度得点が高いほど各不安が強いことを示す。原版どおり5件法(「1. あてはまらない」―「5. あてはまる」)で回答を求めた。

なお, 質問票には上記以外の尺度と項目も含まれていたが, 本研究の検討課題ではないため, 記載を略する。

倫理的配慮

本研究は以下の倫理的配慮を順守して実施された。1) データは統計的に処理され, 研究目的で使用されるため, 個人情報を守秘されること, 2) 回答の拒否が自由であること, 3) 心身の調子が悪い場合には回答を控えてもらうこと, 4) 気分が悪くなった際は中止しても構わないことを, 同意書に明記したうえで口頭でも説明し, 書面での同意を得た。また, 回答者同士の席を離し, 隣席からのぞき込まれることを防止した。なお, 調査の実施中に実際に気分が悪くなり中止した者はいなかった。

分析使用ソフトウェア

R version 4.4.0を使用した。基礎統計量, 相関係数の算出と相関分析にはpsychパッケージ(ver. 2.4.3)を, 重回帰分析にはMASSパッケージ(ver. 7.3.60.2)を, 調整分析にはlavaanパッケージ(ver. 0.6-17)を使用した。

欠測値処理

統計解析にあたって、欠測値を含むデータはリストワイズ削除を行なった。

結 果

基礎統計量と内的一貫性の確認

各変数の特徴を把握するために、基礎統計量と内的一貫性の確認を行なった。その結果を Table 1 に示した。結果として、天井効果または床効果が生じている項目は確認されなかった。また、各尺度の α 係数も $\alpha_s = .88$ — $.97$ と極めて良好であった。そのため、本調査で取得したデータは統計的に検討可能であると判断し、以後の分析へと進んだ。

Table 1
基礎統計量と信頼性係数

	Mean	SD	α	Range
年齢	19.32	0.95	—	18-23
希望の就職先イメージの明確さ	3.43	1.80	—	1-7
単位取得の計画性	5.34	1.68	—	1-7
Sense of Coherence	3.45	0.78	.92	1-5
多次元アイデンティティ				
コミットメント形成	2.99	1.01	.88	1-5
コミットメントへの同一化	2.90	0.96	.88	1-5
広い探求	3.32	0.93	.88	1-5
深い探求	2.89	0.96	.84	1-5
反芻的探究	3.38	0.90	.83	1-5
職業選択不安	3.24	0.90	.97	1-5
自己理解不安	3.21	1.02	.95	1-5
職業移行不安	3.39	1.07	.92	1-5
職業理解不安	3.47	1.03	.92	1-5
決定方略不安	2.85	1.10	.91	1-5

相関分析

各変数間の関係性を把握するため、相関分析を行なった。その結果を Table 2 に示した。まず、各尺度内の内部相関を確認したところ、多次元アイデンティティ ($r_s = .58$ — $.81$, $ps < .001$) と職業決定意識 ($r_s = .53$ — $.75$, $ps < .001$) の両尺度とも有意な正の内部相関が確認された。

次に、希望の就職先イメージの明確さとその他の各変数の間の相関については、単位取得の計画性 ($r = .19$, $p = .002$)、SOC ($r = .33$, $p < .001$)、多次元アイデンティティのうちコミットメント形成 ($r = .65$, $p < .001$)、コミットメントとの同一化 ($r = .56$, $p < .001$)、広い探求 ($r = .39$, $p < .001$)、深い探求 ($r = .52$, $p < .001$) とは有意な正の相関が確認された。一方で、多次元アイデンティティのうちの反芻的探求 ($r = -.14$, $p = .024$) と職業選択不安の全下位尺度 ($r_s = -.22$ — $-.46$, $ps < .01$) との間には有意な負の相関が確認された。

続いて、単位取得の計画性と上述以外の各変数との相関については、SOC ($r = .26, p < .001$)、多次元アイデンティティのうちコミットメント形成 ($r = .20, p = .001$)、コミットメントとの同一化 ($r = .23, p < .001$)、広い探求 ($r = .16, p = .010$)、深い探求 ($r = .22, p < .001$) とは有意な正の相関が、職業選択不安の自己理解不安 ($r = -.14, p = .029$) とは有意な負の相関が確認された。その一方で、多次元アイデンティティの反芻的探求と職業選択不安の自己理解不安以外の下位尺度との間には有意な相関は確認されなかった。

加えて、SOCと上述以外の各変数との相関については、反芻的探求以外の多次元アイデンティティの各下位尺度 ($r_s = .44-.46, p_s < .001$) と有意な正の相関が、決定方略不安以外の職業選択不安の各下位尺度 ($r_s = -.17-.27, p_s < .01$) と有意な負の相関が確認された。その一方で、反芻的探求と決定方略不安との間には有意な相関は確認されなかった。

最後に、多次元アイデンティティの各下位尺度と職業選択不安との間の相関については、コミットメント形成とコミットメントとの同一化ではすべての職業選択不安の下位尺度 ($r_s = -.16-.60, p_s < .05$) と有意な負の相関が、広い探求では決定方略不安以外の職業選択不安の各下位尺度 ($r_s = -.14-.26, p_s < .05$) と有意な負の相関が、深い探求が自己理解不安 ($r = -.28, p < .001$) と職業理解不安 ($r = -.16, p = .012$) と有意な負の相関が確認された。その一方で、反芻的探求ではすべての職業選択不安 ($r_s = .33-.49, p_s < .001$) と有意な正の相関が確認された。

Table 2
変数間の相関係数

	年齢	希望の 就職先 イメージ の明確さ	単位取得 の計画性	Sense of Coherence	多次元アイデンティティ				反芻的 探究	職業選択不安				
					コミット メントの 形成	コミット メントへ の同一化	広い探求	深い探求		全体	自己理解 不安	職業移行 不安	職業理解 不安	決定方略 不安
年齢	—													
希望の就職先イメージの明確さ	.12	—												
単位取得の計画性	-.01	.19 **	—											
Sense of Coherence	.09	.33 ***	.26 ***	—										
多次元アイデンティティ														
コミットメント形成	.07	.65 ***	.20 **	.45 ***	—									
コミットメントへの同一化	.05	.56 ***	.23 ***	.45 ***	.81 ***	—								
広い探求	.04	.39 ***	.16 *	.46 ***	.58 ***	.62 ***	—							
深い探求	.10	.52 ***	.22 ***	.44 ***	.67 ***	.67 ***	.73 ***	—						
反芻的探究	-.03	-.14 *	-.05	.03	-.19 **	-.14 *	.25 ***	.15 *	—					
職業選択不安	-.13 *	-.37 ***	-.11	-.25	-.50 ***	-.42 ***	-.19 **	-.19 **	.47 ***	—				
自己理解不安	-.15 *	-.46 ***	-.14 *	-.27 ***	-.60 ***	-.48 ***	-.26 ***	-.28 ***	.49 ***	.92 ***	—			
職業移行不安	-.02	-.20 **	-.09	-.24 ***	-.29 ***	-.33 ***	-.19 **	-.12	.33 ***	.82 ***	.60 ***	—		
職業理解不安	-.15 *	-.29 ***	-.04	-.17 **	-.42 ***	-.33 ***	-.14 *	-.16 *	.41 ***	.88 ***	.75 ***	.68 ***	—	
決定方略不安	-.12	-.22 **	-.05	-.12	-.26 ***	-.16 *	.05	.05	.36 ***	.78 ***	.66 ***	.53 ***	.62 ***	—

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

希望の就職先イメージの明確さと単位取得の計画性への重回帰分析

希望の就職先イメージの明確さと単位取得の計画性に対して有意な影響を与える変数を確認するため、両者のそれぞれを目的変数、年齢と性別を統制変数、SOC、多次元アイデンティティの各下位尺度、就職決定不安の各下位尺度を説明変数とした重回帰分析を行なった。なお、初期モデルとしてすべての変数を投入したが、多重共線性が生じる可能性を考

慮し、最終モデルとしては有意でない変数をすべて取り除いたモデルを採択した。また、事前に多変量正規性を確認したところ、いずれも多変量正規性を逸脱していたため、推定値を補正するロバスト回帰モデルを採択した。分析の結果を Table 3 に示した。なお、統制のため年齢と性別は有意でなくとも最終モデルに残した。結果として、初期モデルの VIF (Variance Inflation Factor) の最大値はいずれも 4.19 であったが、希望の就職先イメージの最終モデルにおける VIF の最大値は 2.71、単位取得の計画性最終モデルにおける VIF の最大値は 1.02 となった。

まず、希望の就職先イメージの明確さについての最終モデルでは、多次元アイデンティティのコミットメント形成 ($\beta = .46, p < .001$)、深い探求 ($\beta = .20, p < .001$) と、職業選択不安の自己理解不安 ($\beta = -.17, p = .007$) が説明変数として残り、決定係数は $R^2_{adj} = .44$ であった。一方で、単位取得の計画性についての最終モデルでは、SOC ($\beta = .28, p < .001$) のみが説明変数として残り、決定係数は $R^2_{adj} = .07$ であった。

Table 3
希望の就職先イメージの明確さと単位取得の計画性を目的変数とした重回帰分析

	希望の就職先 イメージの明確さ		単位取得の計画性	
	初期モデル	最終モデル	初期モデル	最終モデル
年齢	.05	.05	-.08	-.06
性別	-.03	-.04	.17 **	.16 **
Sense of Coherence	.03	—	.19 **	.28 ***
多次元アイデンティティ				
コミットメント形成	.41 ***	.46 ***	-.10	—
コミットメントへの同一化	.07	—	.10	—
広い探求	-.07	—	-.11	—
深い探求	.23 **	.20 ***	.21	—
反芻的探究	-.01	—	-.07	—
職業選択不安				
自己理解不安	-.21 **	-.17 **	-.13	—
職業移行不安	.06	—	-.02	—
職業理解不安	.07	—	.09	—
決定方略不安	-.04	—	.01	—
R^2	.44	.45	.11	.08
R^2_{adj}	.41	.44	.06	.07
AIC	473.15	452.51	672.88	667.95
BIC	515.36	470.10	715.09	678.50

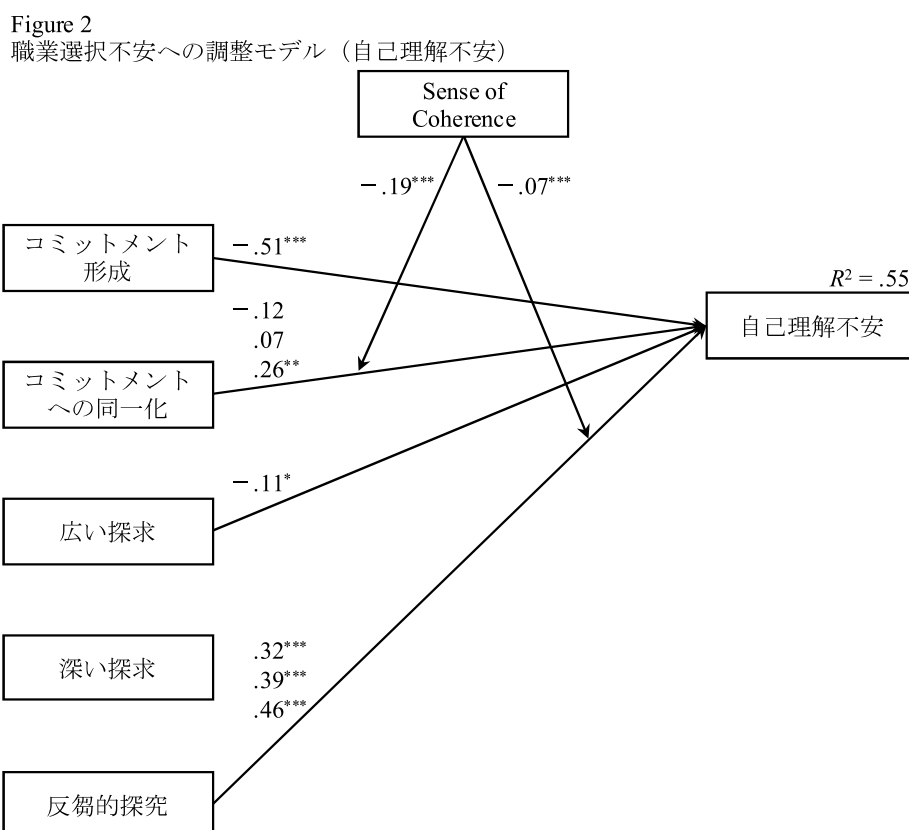
*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

職業選択不安への調整分析

最後に、職業選択不安を多次元アイデンティティが予測し、その効果を SOC が調整するか否かを確認するため、調整分析を実施した。分析に先立って、各変数の標準化を行な

った。Figure 1 に示したモデル（初期モデル）に対して、最尤推定法とブートストラップ法（反復回数 5000 回）を指定した構造方程式モデリングを適用し、有意でない中で最も推定値が低いパスの係数をひとつずつ 0 に固定していった。ただし、交互作用項が有意となった場合は、主効果のパスが有意でなかった場合でも係数は 0 に固定しなかった。最終的に、Figure 2—5 に分割して提示したモデルが得られ、適合度は CFI = 1.00, RMSEA = .000, SRMR = .011 であった。なお、以降の検討のいずれにおいても、SOC から各職業選択不安への主効果は確認されなかった。

まず、自己理解不安に対しては、コミットメント形成 ($\beta = -.51, p < .001$)、広い探求 ($\beta = -.11, p = .036$)、反芻的探求 ($\beta = .39, p < .001$) が有意な効果を有しており、コミットメントの同一化と反芻的探求には SOC からの調整効果が有意であった。単純傾斜分析の結果、コミットメントの同一化については、SOC が $-1SD$ の場合のパス係数は $\beta = -.12$ ($p = .153$)、SOC が $+1SD$ の場合のパス係数は $\beta = .26$ ($p = .003$) であった。反芻的探求については、SOC が $-1SD$ の場合のパス係数は $\beta = .32$ ($p < .001$)、SOC が $+1SD$ の場合のパス係数は $\beta = .46$ ($p < .001$) であった。



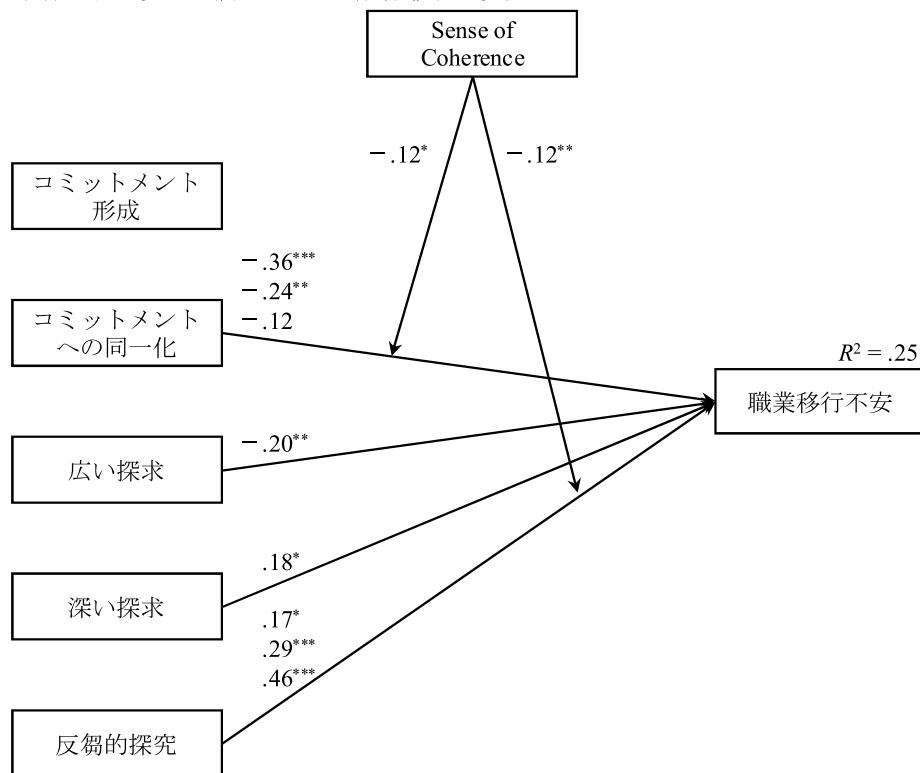
注1) 調整効果が有意となったパス係数については単純傾斜分析を実施し、調整変数が $+1SD$ のときの値を上段に、調整変数が $-1SD$ のときの値を下段に示した。

注2) Figure2—5 に結果を分割しているが、分析は一括して行っている (Figure 1)。

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

次に、職業移行不安に対しては、コミットメントの同一化 ($\beta = -.24, p = .008$), 広い探求 ($\beta = -.20, p = .005$), 深い探求 ($\beta = .18, p = .024$), 反芻的探求 ($\beta = .29, p < .001$) が有意な効果を有しており、コミットメントの同一化と反芻的探求にはSOCからの調整効果が有意であった。単純傾斜分析の結果、コミットメントの同一化については、SOCが $-1SD$ の場合のパス係数は $\beta = -.36$ ($p < .001$), SOCが $+1SD$ の場合のパス係数は $\beta = -.12$ ($p = .281$) であった。反芻的探求については、SOCが $-1SD$ の場合のパス係数は $\beta = .46$ ($p < .001$), SOCが $+1SD$ の場合のパス係数は $\beta = .17$ ($p = .053$) であった。

Figure 3
職業選択不安への調整モデル (職業移行不安)



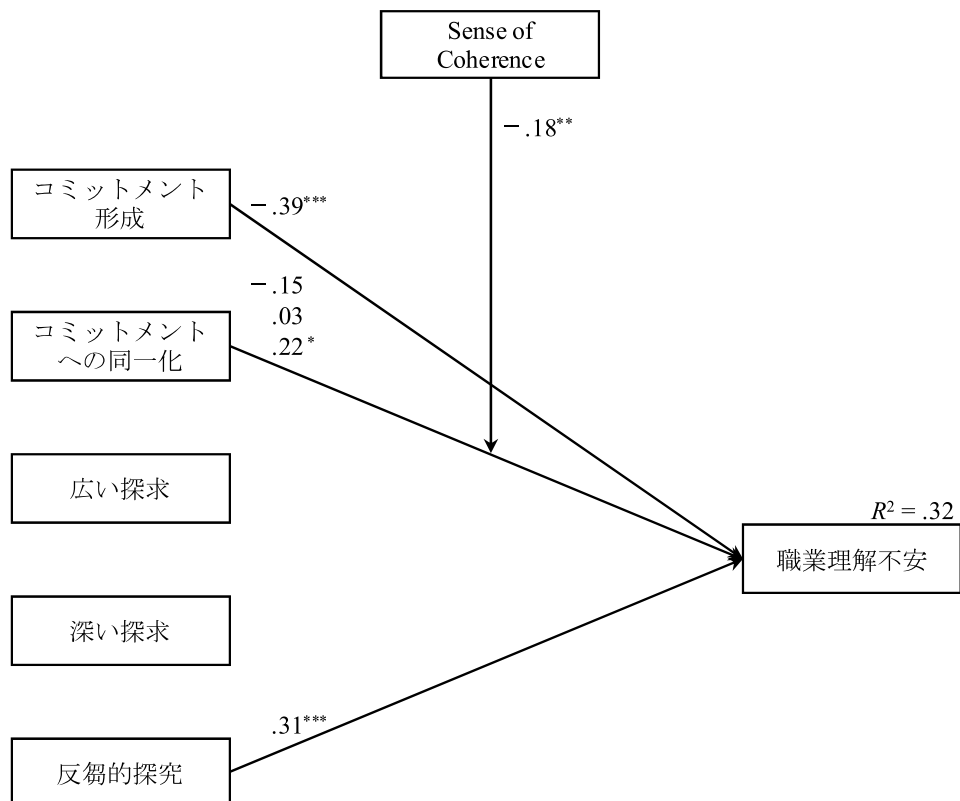
注1) 調整効果が有意となったパス係数については単純傾斜分析を実施し、調整変数が $+1SD$ のときの値を上段に、調整変数が $-1SD$ のときの値を下段に示した。

注2) Figure2 — 5に結果を分割しているが、分析は一括して行っている (Figure 1)。

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

続いて、職業理解不安に対しては、コミットメント形成 ($\beta = -.39, p < .001$), 反芻的探求 ($\beta = .31, p < .001$) が有意な効果を有しており、コミットメントの同一化にはSOCからの調整効果が有意であった。単純傾斜分析の結果、SOCが $-1SD$ の場合のコミットメントとの同一化のパス係数は $\beta = .22$ ($p = .041$), SOCが $+1SD$ の場合のパス係数は $\beta = -.15$ ($p = .132$) であった。

Figure 4
職業選択不安への調整モデル（職業理解不安）



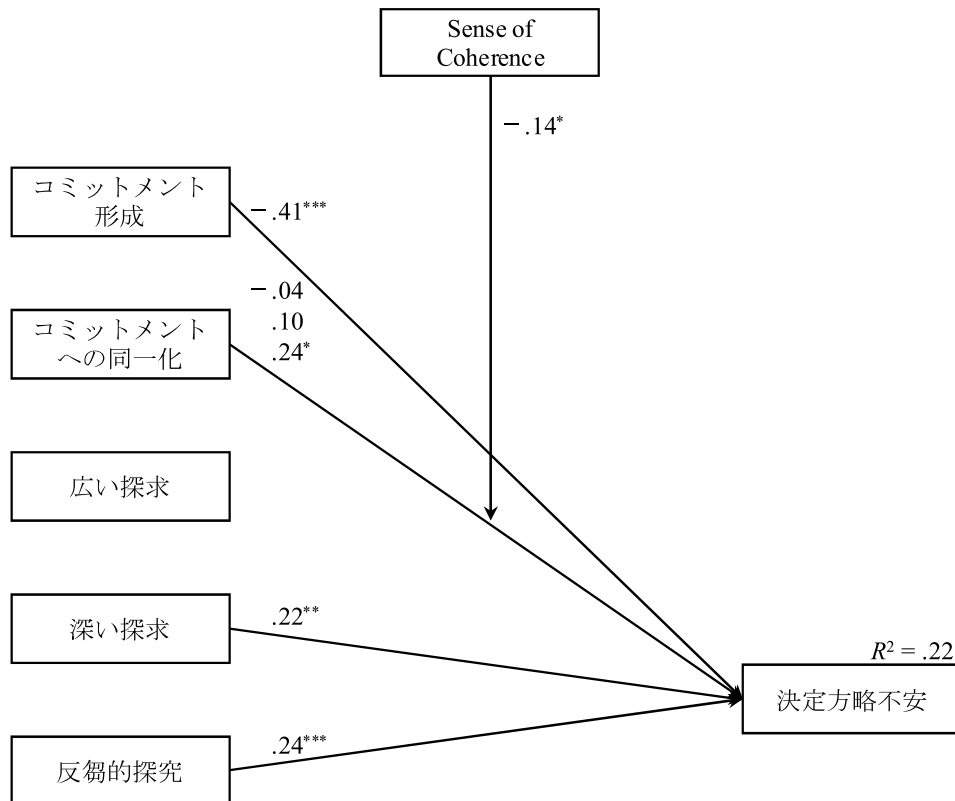
注1) 調整効果が有意となったパス係数については単純傾斜分析を実施し、調整変数が+1SDのときの値を上段に、調整変数が-1SDのときの値を下段に示した。

注2) Figure2 — 5に結果を分割しているが、分析は一括して行っている（Figure 1）。

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

最後に、決定方略不安に対しては、コミットメント形成（ $\beta = -.39, p < .001$ ）、深い探求（ $\beta = .22, p < .003$ ）、反芻的探求（ $\beta = .24, p < .001$ ）が有意な効果を有しており、コミットメントの同一化にはSOCからの調整効果が有意であった。単純傾斜分析の結果、SOCが-1SDの場合のコミットメントとの同一化のパス係数は $\beta = .24$ （ $p = .049$ ）、SOCが+1SDの場合のパス係数は $\beta = -.04$ （ $p = .748$ ）であった。

Figure 5
職業選択不安への調整モデル（決定方略不安）



注1) 調整効果が有意となったパス係数については単純傾斜分析を実施し，調整変数が+1SDのときの値を上段に，調整変数が-1SDのときの値を下段に示した。

注2) Figure2—5に結果を分割しているが，分析は一括して行っている（Figure 1）。

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

考 察

本研究の目的は，第一に大学生の就職不安に対してアイデンティティ発達のどの側面が効果を有しているかを検討すること，第二にこの効果がSOCによって調整されているかを検討することであった。これらの検討には調整分析を用いることとし，Figure 1に示したモデルに対し構造方程式モデリングを適用した。この検討によって，大学生が就職活動開始前までに身に着けておくべき要素のひとつを明らかとすることが目的であった。また，副次的検討として，アイデンティティの強さと就職不安の強さが希望の就職先イメージの明確さと単位取得の計画性に与える影響も取り上げた。

各変数の基礎統計量と各尺度の内的一貫性，各変数間の相関関係の検討

まず，各変数の基礎統計量と各尺度の信頼性係数の値から，本研究における各変数には不備がなく，いずれも分析に使用可能であることが確認された。このことから，本研究の結果の信頼性は担保されていると考えられた。また，多次元アイデンティティと職業選択

不安の内部相関が高かったことから、これらを詳細に検討するにあたっては、それぞれの変数が有する共通部分の影響を排除しつつ検討を進める必要があることが示され、重回帰分析や構造方程式モデリングによる検討が妥当であると考えられた。

次に、相関分析の結果から、希望の就職先イメージの明確さと単位取得の計画性との間には有意な正の相関が確認されたが、その値は決して高いものとは言えなかった。このことは、大学の単位取得と希望の就職先イメージの明確さについての関連はそれほど強くはないと解釈できるが、これはデータを取得した学部や学科の影響による可能性がある。すなわち、特定の専門職とつながりが明らかな学部や学科、例えば教育学部や工学部などであれば、単位取得の計画性と希望の就職先イメージの明確さの関連は強いが、文学部や史学部、経済学部などであれば、両者の関係は弱くなる可能性が高いと考えられる。つまり、授業内容が将来の仕事と明確につながっているか否かによって、両者の関係性は規定される可能性がある。またその一方で、単位取得の計画性の背後にある要因、例えば課題に対して真面目に取り組む傾向といったものが背後にあり、それが就職先イメージの明確さと関連している可能性がある。いずれにせよ、今回の検討からは両者の関連性について何かしらの判断は下せないと考えられた。

希望の就職先イメージの明確さと単位取得の計画性を予測する変数の検討

SOCと多次元アイデンティティ、職業選択不安によって、希望の就職先イメージの明確さと単位取得の計画性がどのように説明されるのかを検討した。まず、希望の就職先イメージの明確さについては、コミットメント形成と深い探求が正の、自己理解不安が負の有意な効果を有しており、決定係数からその分散の44%が説明されていた。このことから、希望の就職先イメージが明確になるには、まず一度コミットメントを形成し、その後深い探求を行い、再度コミットメントを形成していくといった過程を経ることで、自己理解が不十分であるという不安が低まっていることが重要である可能性が示唆された。このことを踏まえると、希望の就職先イメージを明確にするためには、自己分析を繰り返す必要があると考えられる。これには時間を要する作業が必要となるであろうことから、就職活動が本格化する前に自己分析を深めるステップが重要になると考えられた。

次に、単位取得の計画性については、SOCのみが有意な正の効果を有していたが、決定係数からその分散の7%しか説明されていなかった。このことから、単位取得の計画性には今回検討した要因以外が重要であると考えられ、この点については示唆を得ることができなかった。しかしながら、単位取得を計画的に行っているか否かは、多次元アイデンティティや職業選択不安とは関係ない行動であることは示された。

職業選択不安に対して多次元アイデンティティが有する効果の検討

まず、多次元アイデンティティの下位尺度から職業選択不安の下位尺度への効果につい

では、多次元アイデンティティの内容によって効果を有する職業選択不安の内容が異なっていた。そのなかでも、多次元アイデンティティの中核であると考えられるコミットメント形成は、職業移行不安を除いた各職業選択不安に対して有意な負の効果を有していた。このことから、自らがコミットメントすべき対象を明確に定めることが、就職不安に対処し就職活動を進めていくうえで優先的に身に着けておくべき要素であると考えられた。しかしながら、コミットメント形成は、その計画に対する自らの能力を担保しているわけではない。そのため、職業移行不安には効果を有していなかったのかもしれない。その点、コミットメントとの同一化はコミットメント形成から一歩進んで、将来の計画が自分の望むものであると確信している度合いを反映しており、その背後には、自らがコミットメントしている計画に対する効力感が潜んでいる可能性がある。そのため、職業移行不安に対しても有意な負の効果を有していたのではないだろうか。

一方で、コミットメントの探求のあり方については、広い探求は自己理解不安、職業移行不安に対して有意な負の効果を有しており、深い探求は職業移行不安、決定方略不安に対して有意な正の効果を有していた。これについても、多次元アイデンティティの内容に沿った結果であると考えられる。すなわち、広い探求は自らの将来に対する多様な選択肢の中から、自らにあったものを積極的に探求する姿勢を反映しているのに対し、深い探求はすでにコミットメントしている対象に対して再考し、更に探求を深めていく姿勢を反映していることに由来すると考えられた。深い探求は自らに疑問を投げかける側面があることから、職業移行不安と決定方略不安を高めるように作用するのではないだろうか。

またその一方で、いずれにおいても共通していたのは、反芻的探求が各職業選択不安に対して有意な正の効果を有していたことである。反芻的探求は、コミットメントに関与しない不適応的な探求を意味している。反芻的探求は、その定義からして不適応的な側面を有しており、項目内容も不安に駆られた探求を反映しているため、職業選択不安の各下位尺度のすべてを増進する効果を示したのであろう。

以上を踏まえると、就職不安に対処しつつ就職について考え、就職活動を進めていくには、就職活動が本格的に開始される以前に、ある程度の広い探求と深い探求を繰り返し、コミットメントを形成しておく必要があると考えられる。そうであれば、就職活動に伴う自己分析は、就職活動が本格化する以前に進めておくことが必要になるだろう。希望の就職先イメージの明確さを予測する重回帰分析の結果からも、希望の就職先イメージが明確になるには、コミットメント形成と深い探求が重要であった。また、就職活動開始後の深い探求については、個人の必要に応じたキャリアサポート面談を受けることが大切であると考えられる。これは、就職活動中の深い探求によるコミットメント対象の再考は、就職活動の職業移行不安と決定方略不安を高めるため、思考や選択の適切なガイドが重要になるからである。

職業選択不安に対して多次元アイデンティティが有する効果のSOCによる調整効果の検討

本研究では、健康生成モデルの観点から、職業選択不安に対して多次元アイデンティティが有する効果がSOCによって調整されているかを検討した。結果として、自己理解不安と職業移行不安に対するコミットメントとの同一化と反芻的探求、および、職業理解不安と決定方略不安に対するコミットメントとの同一化において、SOCの調整効果が確認された。

コミットメントとの同一化における調整効果については、平均的なSOCの場合、コミットメントの同一化は各職業選択不安に効果を有さないが、強いSOCを有する場合には各職業選択不安に対して負の効果を強める方向に、弱いSOCを有する場合には各職業選択不安に対する正の効果を強める方向に調整されるという結果が示された。先に、コミットメントの同一化にはすでに形成したコミットメントに対する効力感が潜んでいる可能性を指摘したが、これらの結果は、SOCによってこの効力感が職業選択不安に対処するために動員されたことを意味していると考えられる。すなわち、コミットメント対象への効力感は、強いSOCを有していることによって初めて職業選択不安の対処に役立つのであろう。

一方で、反芻的探求が自己理解不安と職業移行不安に対して有する効果は、SOCが強くなるに従って減弱する方向に調整されていた。反芻的探求は不適応的な探求を意味しているため、不安に対処する資源足りえないことを踏まえると、この結果はSOCによって今回検討した以外の資源が動員された結果、反芻的探求の負の効果を減弱したと解釈できるかもしれない。あるいは、強いSOCを持つ者は、性格特性的に不適応的な反芻を行いづらい可能性もある。しかしながら、この点については今回の研究からは明らかにできない部分である。

いずれにせよ、SOCから各職業選択不安への主効果は確認されなかったため、個人が強いSOCを有することはそれ単体で職業選択不安を和らげることはないと考えられる。しかしながら、SOCはコミットメントとの同一化が各職業選択不安を弱めるように作用させることや、反芻的探求が職業理解不安や決定方略不安を強めるように作用することを妨げることによって、間接的に職業選択不安の減弱に有用であると考えられた。

まとめと今後の課題

大学生において進路決定とそれに伴う就職活動は避けられない課題である。本研究の結果から、大学生が職業選択不安に対処しつつ就職活動に取り組んでいくためには、将来について広く探求し、アイデンティティにおけるコミットメント形成が進んでいることが重要であることが示唆された。また、就職活動の前提となる希望の就職先イメージを明確にするためにも、就職活動が本格化する前に、形成したコミットメントを一度ふりかえり、再構築する過程を体験していること、その過程でキャリアサポート面談などを受け、ふりかえりにおける思考の進め方と進路選択のガイドを得ていることが重要であると考えられ

た。加えて、発達したアイデンティティが職業選択不安への対処において十全に効果を発揮するには、SOCを強めておくことも重要であると考えられた。

本研究の限界として、対象となった大学生が1年生に偏っていたことが挙げられる。職業選択不安は学年が進むにつれてその切迫度が増していくと考えられ、自らが就職活動を行うという実感がまだ乏しい1年生と、そろそろ就職活動に向けた準備が必要かと意識し始める2年生、就職活動が現実味を帯び、就職先の領域によっては就職活動が開始される3年生、就職活動の只中かあるいは活動を終えた4年生では、職業選択不安の在り様も多次元アイデンティティの在り様も異なると考えられる。そのため、今後の課題として、本研究の結果を大学生全体に適用可能か、あるいは学年ごとに違った結果が得られるのかについては、各学年の調査協力者を均等に集めたうえで多母集団同時分析による検証を行なうことが必要である。

また、多次元アイデンティティと職業選択不安との関係について、今回は下位尺度ごとの効果を検証した。DIDSの日本語版は、アイデンティティ・ステータス²⁷⁾に対応した検討が可能な尺度であるが、本研究ではその点が未検討である。今後、職業選択不安の程度を問題にする場合には、アイデンティティ・ステータスによって職業選択不安の程度やアイデンティティ・ステータスごとに強いあるいは弱い職業選択不安の種類を検討することも重要であろう。

加えて、今回はSOCの測定にTP-SOC9を使用した。方法の項で述べたとおり、この尺度はAntonovsky¹⁹⁾ 20) が提唱したSOCの構成概念に近づけたうえで、少数項目で捉えることを試みたものであるが、SOCを測定する尺度のデファクトスタンダードとなっている人生の志向性に関する質問票²⁰⁾の29項目版(SOC-29)との関連は未検証である。そのため、TP-SOC9とSOC-29は異なる測定性質を有している可能性が否めない。今後、TP-SOC9とSOC-29が同様の測定性質を有しているか否かの確認か、あるいはSOC-29を用いて本研究の結果を追加検証する必要があるだろう。そのような制約があるにもかかわらず、今回TP-SOC9をSOCの測定に使用したことについては、TP-SOC9は過去・現在・未来の3つの時点におけるSOCの程度を明示的に切り分けることができるためである。本研究では検討課題の主眼と紙幅の都合で検証していないが、進路決定や就職活動等のキャリアに関する検討にあたっては、この3つの時間的視点が重要である可能性がある。何故ならば、このような移行期には過去と現在のSOCが安定的であっても、未来におけるSOCが不安定になると考えられるためである。

アイデンティティの形成は多くの大学生が属する青年期後期の重要な発達課題である。また、進路決定とそれに伴う就職活動は、学年によって程度の差はあるものの、大学生において避けられない課題であり、アイデンティティの形成において重要な役割を果たしている。大学生が大学生活を満ちたものとし、将来の社会生活への移行を支援していくことは大学の使命のひとつであるため、この分野における研究を今後より一層充実させてい

く必要がある。

引用文献

- 1) 松田 侑子・永作 稔・新井 邦二郎, 職業選択不安尺度の作成, 筑波大学心理学研究, 36, 2008, 67-74.
- 2) Schlossberg, N. K., A model for analyzing human adaptation to transition, *The counseling psychologist*, 9 (2), 1981, 2-18.
- 3) 山本 多喜司・シーモア・ワップナー, 人生移行の発達心理学, 北大路書房, 1992.
- 4) 原田 新・池谷 航介・松井 めぐみ・望月 直人, 「大1 コンフュージョン」の実際(第1報)——高校と大学のギャップに戸惑う新入生の実態調査——, 岡山大学教師教育開発センター紀要, (8), 2018, 97-107.
- 5) 松田 侑子・新井 邦二郎・佐藤 純, 就職不安に関連する研究の動向, 筑波大学心理学研究, 40, 2010, 43-50.
- 6) 若松 養亮, 教員養成学部生における進路意思決定の遅延——3 回生 11 月時点で未決定の学生を対象に——, 滋賀大学教育学部紀要 I 教育科学, (54), 2004, 77-86.
- 7) 北見 由奈・茂木 俊彦・森 和代, 大学生の就職活動ストレスに関する研究——評価尺度の作成と精神的健康に及ぼす影響——, 学校メンタルヘルス, 12 (1), 2009, 43-50.
- 8) 北見 由奈・森 和代, 大学生の就職活動ストレスおよび精神的健康とソーシャルスキルとの関連性の検討, ストレス科学研究, 25, 2010, 37-45.
- 9) 森本 康太郎, イラショナルビリーフが就職活動中のストレス反応および就職活動の遂行に与える影響, 応用心理学研究, 44 (3), 2019, 191-192.
- 10) 下山 晴彦, 大学生の職業未決定の研究, 教育心理学研究, 34 (1), 1986, 20-30.
- 11) 森本 文子, 大学生における職業未決定とアイデンティティとの関連, 九州大学心理学研究, 9, 2008, 205-213.
- 12) 安藤 聡一郎・有子山 布美子, 大学生における職業未決定の特徴——アイデンティティと職業アイデンティティの関連との視点から—— 神戸親和女子大学大学院研究紀要, 11, 2015, 25-33.
- 13) Erikson, E. H., *Identity and the life cycle*, New York: WW Norton & Company, Inc, 1959 (西平 直・中島 由恵(訳), アイデンティティとライフサイクル, 誠信書房, 2011)
- 14) 高村 和代, 課題探求時におけるアイデンティティの変容プロセスについて, 教育心理学研究, 45 (3), 1997, 243-253.
- 15) 杉村 和美, 関係性の観点から見た女子青年のアイデンティティ探求——2 年間の変化とその要因——, 発達心理学研究, 12 (2), 2001, 87-98.
- 16) 谷 冬彦, 青年期における同一性の感覚の構造——多次元自我同一性尺度(MEIS)の作成——, 教育心理学研究, 49 (3), 2001, 265-273.

- 17) Luyckx, K., Schwartz, S. J., Goossens, L., Soenens, B., & Beyers, W, Developmental typologies of identity formation and adjustment in female emerging adults: A latent class growth analysis approach, *Journal of research on adolescence*, 18 (4) , 2008, 595-619.
- 18) 中間 玲子・杉村 和美・畑野 快・溝上 慎一・都筑 学, 多次元アイデンティティ発達尺度 (DIDS) によるアイデンティティ発達の検討と類型化の試み, *心理学研究*, 85 (6) , 2015, 549-559.
- 19) Antonovsky, A. *Health, stress and coping*. San Francisco. Jossey-Bass, 1979.
- 20) Antonovsky, A. *Unraveling the mystery of health: How people manage stress and stay well*, Jossey-Bass Publishers, San Francisco, 1987.
(山崎 喜比古・吉井 清子 (監訳), 健康の謎を解く——ストレス対処と健康保持のメカニズム——, 有信堂高文社, 2001)
- 21) 山崎 喜比古・戸ヶ里 泰典, ストレス対処・健康生成力SOCとは, 山崎 喜比古・戸ヶ里 泰典・坂野 純子 (編), ストレス対処力SOC——健康を生成し健康に生きる力とその応用——, 有信堂高文社, 2019, 3-10.
- 22) 今井田 貴裕・福井 義一, 健康生成モデルにおける汎抵抗資源 (GRRs) の分類の妥当性の検討および首尾一貫感覚 (SOC) の形成に寄与する GRRs の特定, *心の危機と臨床の知*, 23, 2022, 1-21.
- 23) 磯和 壮太郎・今井田 貴裕, 学校教員におけるコミュニケーションの得手不得手意識が Sense of Coherence を媒介して専門性向上意識に及ぼす影響——学校組織風土認知を調整要因として——, *くらしき作陽大学・作陽短期大学研究紀要*, 53 (2) , 2021, 11-22.
- 24) 今井田 貴裕・磯和 壮太郎, 青年期における TP-SOC のサブタイプの探求——人生の意味, 自尊感情, 精神的健康度, 遅刻・欠席に着目して——, *キャリアセンター紀要*, (13) , 2024, 35-45 .
- 25) 今井田 貴裕・磯和 壮太郎, 簡易版学校教員の職務多忙感・負担感尺度と Time Perspective-Sense Of Coherence 9 の作成. *キャリアセンター紀要*, (12) , 2023, 13-24.
- 26) Togari, T., Yamazaki, Y., Nakayama, K., & Shimizu, J, Development of a short version of the sense of coherence scale for population survey, *Journal of Epidemiology & Community Health*, 61 (10) , 2007, 921-922.
- 27) Marcia, J. E., Development and validation of ego identity status, *Journal of Personality and Social Psychology*, 3, 1966, 551-558